

## 終戦の日に憶う

顧問 廣本 照雄

8月15日は太平洋戦争の終戦の日、雨の中、靖国神社参拝に出かけた。友人、知人の若き日の面影を憶い出し乍ら、鎮魂の祈りを捧げた。

参拝後に隣接の「遊就館」を訪れた。ここには神社に寄贈された「零戦」が展示されていた。

零戦は戦時中、敵の米軍を悩ませた日本海軍の誇る優秀な戦闘機であった。私にはこの零戦に特別な憶い出がある。

終戦の年の1月、すべての授業は取止めとなり全員勤労働員されることになった。行先は群馬県の中島飛行機・小泉工場。ここでは零戦、銀河等海軍の航空機を製作していた。抽選で私に割り当てられた仕事が零戦の鉸打工であった。狭い胴体の内側で受け手が金属板を押し当て、外から3mmの長さのジュラルミンの鉸をエアハンマーで押しつぶしてゆく、2人1組でやる作業だった。

約1ヶ月後、郷里の広島で徴兵検査を受けることになった。検査の結果は第一乙種合格、近眼以外はすべて健康であった。さて、検査の最後に憲兵が兵種を決めるのだが、その時「貴様は今、何の仕事をしているか？」と質問したので私は即座に「ハイ、飛行機の組立作業をやっています」と答えた。すると憲兵は「そうか」と云って兵種の欄にサラ～と「飛行整備兵」と記したのである。この一瞬に私の運命は決ったと云ってよい。

このとき、同時に検査を受けた旧制高校同級のA君は歩兵と決まり、間もなく広島の歩兵11連隊に入隊し、8月6日の原爆で亡くなった。

一方、私には召集令状がなかなか来ない。当時の事情を推察すると飛行機の不足著しく、整備する飛行機も少なく、整備兵の必要がなかったのではないかと思われる。そのうちに5月には海軍主計将校の試験を受け9月1日に入隊と決まった。

2月下旬、小泉工場はB29、50機による空爆を受け一日で壊滅、動員学徒は全部引揚げた。

4月からは神奈川県大和市の横須賀海軍工廠分廠に動員され、今度は空爆を避けるため、横穴式防空壕の中で飛行機部品組立作業に従事した。

終戦直前の8月9日朝、法学部の横田喜三郎先生が工場に来訪、学生を集めて講話されたとき、“広島におちた新型爆弾は実は原子爆弾であること、広島の街は一発で壊滅したこと、近くポツダム宣言を受諾し終戦となるだろう”とのことなどを知らされた。

**(元昭和電工(株)副社長、昭和高分子(株)社長、会長)**

